塩竈

宮城県
Shiogama

新たな生活の舞台に多くの思いを込めて

4533戸が全半壊した宮城県塩竈市。一日も早い災害公営住宅の建設に向けて、急ピッチで事業を進めている。現在の状況をレポートする。

明治時代、佐浦山の花見風景。踊りなどのアトラクションもあった
（写真提供：佐浦弘一氏）

春には桜が咲き誇る鹽竈神社

歴史に学ぶ住まいづくり

塩竈市の歴史は深い。切り込んだ入り江の近くには、奥州一之宮として東北一帯の崇敬を集めてきた鹽竈（しおがま）神社があり、伊達政宗ゆかりの名刹も残る。

「単に住宅を作るだけではなく、その土地の歴史や文化を守り、地域に溶け込んだコミュニティ形成の手助けをすることが私たちの役割です」

そう語るのは、宮城県、福島県下の災害公営住宅の建設支援を担当する永井正毅。昨年10月から塩竈市と協議を進め、市内数カ所で計画されている災害公営住宅のうち、2月に2カ所の建設要請を受けた。現在は測量や地盤調査ののち、設計段階に進んでいる。

西塩釜駅から約5分の場所にある錦町地区。佐浦山と言われ、鹽竈神社の御神酒「浦霞」で知られる佐浦酒造の蔵元・佐浦家所有地だったが、地元のためにと提供された。駅からも近く仙台方面への通勤にも便利。病院や市役所も近いので、子育て中のファミリーにも安心だ。3棟の集合住宅が計画されているが、敷地は不整形で高低差もある。しかも鉄道隣接という難しい条件だ。

佐浦山には佐浦家の別荘があり、戦前、春には数十本もの桜が咲き誇った。そこを地元の人々にも開放して花見が大々的に行われたという、地域に開かれた場所。鹽竈神社一帯に咲く桜は今も、多くの観光客を集める。

「そうした歴史に学び、敷地には復興のシンボルとして桜をたくさん植樹します。敷地内の公道は、近隣の方にとっても駅への近道。花や緑、ベンチも設けて、地域の皆さんが自由に憩える、賑わい空間にしたいですね」

これまでの経験から工夫を引き出す

元々戸建ての持ち家に住んでいた被災者の多くは、戸建てに住むことを希望する。それに応えるかたちで、伊保石地区では39戸の戸建住宅が計画されている。高台の新興住宅地の中にある貸し農園が建設用地として提供された。

建設地は既存の住宅地と幼稚園の間にあるので、両者を結ぶ道を作り、誰もが通り抜けられるようにする。また、公営住宅エリアにも新しい集会所を建て、地域の既存集会所とともに、周辺の人々にも活用してもらう。

「エリア内の6m道路は、敷地との間に芝生を植えて公園のようにします。皆が立ち話などできれば、子供たちの見守りにもなると考えました」

公営住宅は市が管理することになるが、集合住宅に比べて戸建住宅地を管理するのは難しい。将来的に市が払い下げることも想定し、住み手に合わせて改変できる家が必要となる。中越地震の際、山古志村で建設された戸建ての災害公営住宅の例に学び、吹き抜けに床を張ったり、増築したりして部屋数を増やせる工夫も取り入れた。

塩竈市には、震災後に長野県須坂市から多くのカンナの花が寄贈された。その感謝の気持ちを込めて、カンナの道を作るプランも生まれた。

ただ住宅を作るだけではなく、歴史、経験、思い、希望、たくさんのものを計画に詰め込んで、新たな生活の舞台を築くのだ。

「住まいの再建は復興に向けての第一歩。1日でも早く入居していただけるようチーム一丸となってがんばっています」と永井。地域の人々の期待の声が、大きな励みだ。

永井正毅 ながい まさたけ
宮城県、福島県下の災害公営住宅の建設支援の責任者。

Close Up 桜咲く佐浦山に、賑わいをふたたび

株式会社佐浦　佐浦弘一 さん

日本酒「浦霞」で知られる佐浦酒造は、鹽竈神社の御神酒酒屋として288年続く酒蔵だ。現社長の佐浦弘一さんは13代目。江戸時代末期から明治初期に建てた「享保蔵」、大正時代の「大正蔵」、平成に入って東松島市に建てた「矢本蔵」の3つの蔵で酒を醸す。

震災の時は蔵の壁が剥(はく)落し、敷地は胸下まで浸水した。ライフラインも停止したため、発酵中の酒の中で商品化できたのは一部だけだったという。そんな中、佐浦では被災後、酒の移送用のタンクローリーを使い、給水活動も実施。また、地域のカキなどの養殖漁業復興のため、フォークリフトや機材を提供してきた。

「鹽竈神社を中心に歴史を重ねてきた塩竈は、何かかあれば助け合う、結束の強い地域です。それに日本酒は食と密接に関係する。地域の食文化の復興に役立てばと考えました」と佐浦社長は振り返る。

錦町地区の佐浦山と呼ばれる佐浦家の所有地を災害公営住宅用地として提供したのも、地域の復興を願ってのことだった。

「すり鉢状の地形の塩竈に、空き地が少ないのは明らかでしたから。戦前まで桜の時期には地元の人を大勢招いた場所です。活用してもらい、地域の賑わい復活につながればうれしいです」

佐浦家には、塩竈で災害のあるたびに復興に尽力してきた歴史がある。慶応の大火で焦土となった時は、持ち山の杉を住宅用に寄付した。明治時代には9代目当主の佐浦茂登が、田を埋め立てて宅地を造成した。今の佐浦町だ。佐浦山に別荘を建てたのはその頃。春には数日間にわたる花見宴会を催し、地域の人を楽しませた。

「そうした先祖たちに比べると、震災後の私共の活動はまだまだ十分とはいえません。地元で長く続けてこられたのは地域社会あってのことです。塩竈のために何をしていけばいいか、これからも考えていきます」

佐浦山には、今も幾本かの桜が残る。災害公営住宅の建設とともに敷地には数十本の桜も植樹される予定だ。

「佐浦山の桜が再生すれば、またお花見ができますね。地域の人が集まる場所になるかもしれない。楽しみです」

花の下で傾ける「浦霞」の味も、きっと格別だ。

漆喰の土蔵と石蔵が並ぶ敷地にはショップ「浦霞酒ギャラリー」があり、猪口を購入すれば試飲もできる。県内作家の酒器も展示

●株式会社佐浦
宮城県塩竈市本町2-19
TEL.022-362-4165
http://www.urakasumi.com/